

HOTEL JUNKIES

vol. 29
ホテル
ジャンキーズ

800yen

ホテル **生** 情報

特集

グリッツ
クラブ
フロア
ルト
ン
大阪の

インタビュー

新連載

ホテル格付

西和彦の
ホテルに
住んで
いた訳

ホテル
ピク
ニック

ロンドンの
BEST
10

篠井英介の

10

10

村瀬千文のスイートルーム

西 和彦

NY、ロンドン、パリなど世界各国の定宿に置いてある「西和彦のお泊まりグッズ」の中身は
ソバ殻枕、米、ワイン、CD、パジャマ

●にし・かずひ

一九五六年神戸生まれ。早稲田大学在学中に株式会社アスキーを設立。日本で初めてコンピュータの利用者サイドに立つた雑誌を出版。その一方でビル・ゲイツと意気投合し、マイクロソフト社の日本代理店となるなど、日本にパソコンを普及させた。アスキーを辞めた後、客員教授を勤めるマサチューセッツ工科大学があるボストンと東京と半々の生活中。大のホテル好きとしても知られる。

キミ、ずっと風呂入って
ないんだろっ？

村瀬 西さん、ホテルにお住まいだったことがあるそうですね。

西 ええ、二十三才から三十三才まで十年ほどホテルオークラに、それから四十一才から四十四才まではパークハイアット東京に。

村瀬 二十三才でオークラに住む・・・こりや、相当浮いていたでしょうねえ（笑い）。きっかけは何だったんですか？

西 まだ大学生だった二十二才の時に、青山のワンルームマンションでアスキーを始めたんですけれど、二年間、

忙しくて、お金もなくて、ほとんど会社で暮らしてたんですよ。

村瀬 つまり、よく言えば職住超接近言い換えると、家なき子（笑い）。

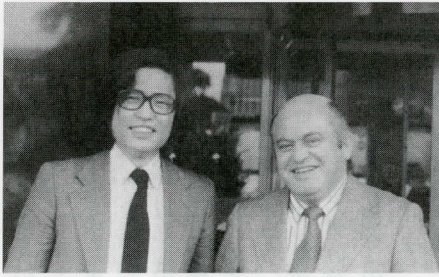
西 だいたい仕事していて眠くなると椅子を互い違いに並べてその上で寝てました。そんなある日、取材先の外国企業の社長（上写真）がオークラに泊まっていたんで、彼のスイートで会ったんですよ。取材が終わったら、彼が言うんです。「キミ、ずっと風呂に入っていないんだろっ？ここに入って行け」って（笑い）。一週間くらい入ってなかったんですが、ああいうの匂いとかでわかるんですかね？

村瀬 そりやもう（笑い）。で、そこですぐお風呂に入ったんですか？

西 ええ。それで僕が風呂に入っている間に僕が着ていた洋服を全部、一時間仕上げの特急ランドリーに出してくれて。これには感動しました。こんな世界があるんだって。それから週末になると、オークラに泊まるようになりました。それまでは洗濯もめんどつで、当時青山通りと表参道の交差点にあったマンシングウェアのショップに週一回着替えを買いに行つて、着ていた下着は全部捨てていましたから（笑い）。

村瀬 あ、そう・・・もう何を言われても驚かなくなりました（笑い）。

西 その後、マイクロソフトにいたのでアメリカに住んだりしましたが、日本に帰ってきたときは、三十三才までずっとオークラが我が家でした。



ジャック・トラミエル氏と
（お風呂に入浴後）

その街で 一番いいホテルの 一番安い部屋



撮影・井上孝明

村瀬 海外ではどこかお気に入りのホテルがあるんですか？

西 ロンドンはこちら十八年ほどずっとサボイで、ニューヨークはプラザアテネ、パリはここ十五年ほどはリッツとプラザアテネのどちらかが定宿です。

村瀬 そうしたホテルは最初、どうやって選んだんですか？

西 サボイはある外国人の取引先の方に「ロンドンだったらサボイだよ」って言われて初めて泊まってみたんですが、出張先で行った土地の一番良いと言われているホテルの一番安い部屋に泊まるようになったんです。

村瀬 あ、それ、私もまだ二十代半ばくらいの若い頃によくやりました。若かったせいか「一番安い部屋お願いします」って言うのと、ホテルの人の表情がふつとや

さしくなつて、ずいぶん親切にしてくれましたね。

西 今から十五年から二十年前って言う、まだバブルのホテルブームの前ですから、まっとうなホテルのまっとうなサービスやインテリアがあった時代ですよ。そういうものをいつか自分のライフスタイルに取り入れて行きたいって思っていました。そのうち、社長になつてからは仕事でも使うので、スイートルームに泊まるようになったんです。

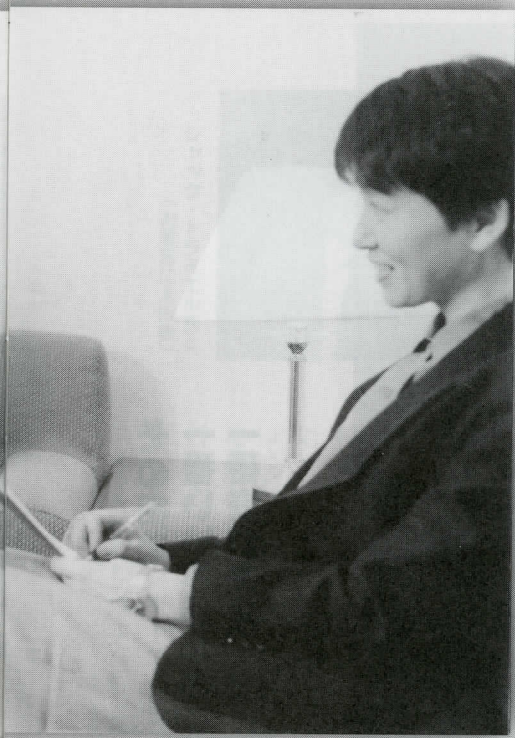
村瀬 一瞬だけ、私と同じこととしてたのに、即、道が激しく大きく、くつきりと分かれましたね（笑い）。

一泊一六〇万ドルの部屋

西 三十代の前半はずいぶん派手にやってきました。プライベートジェットを持つて、朝はロンドン、昼はパリ、夜はチューリッヒなんて生活をごく普通にやっている連中がヨーロッパにはたくさんいるんですよ。彼らに教えてもらつて、けっこうド派手なりゾートにいろいろ行ってみました。ほとんど「探検」のような感じでした。

村瀬 どのあたり行かれましたか？

西 スイスのサンモリッツの『バドゥリユッツ・パラス』とかダボスの『ベルベデーレ』、あとはブルターニュの



『エルミタージュ』や夏の地中海やヴェニスも。

村瀬 で、そういうところで、思い切り遊んでみて、わかったことは？

西 最初のうちは日常生活との乖離を楽しむっていうのがあったんだけど、そのうち、その乖離がさびしいっていう感じになって・・・結局、どんなに通っても毎回部屋がちがうわけだし、ホテルの部屋に一日中いても飽きないようなホテルに泊まりたくなって、いつそのこと、そういう空間を自分で作ろうと思って、ニューヨークのセントラルパーク・サウスに公園を見おろすアパートメントの三十二階を買ったんです。四百万ドルで、改装費が別に百万ドルかかりました。今はもう売ったけど・・・。

村瀬 それだけあれば私が泊まりたいホテルに全部泊まれるかも（笑い）。改装はご

自分でこうしたい、ああしたいというのを？

西 ええ、二年間かけて、ああでもない、こうでもないって。前のブッシュ大統領の時のホワイトハウスのインテリアを手がけたマーク・ハンプトンに頼んだんです。この人の先生はデイヴィッド・ヒックスという有名な人で川奈ホテルの貴賓室を手がけています。

村瀬 で、気に入るものができたんですか？

西 実は結局、三回しか泊まらなかったんです。あとはすぐ隣のリッツカールトンに泊まって、仕事の時だけアパートに通ってました。

村瀬 ええっと、五百万ドル割ることの三で、一泊当たり百六十万ドル・・・（笑い）。でも、なぜ？

西 実は作ってみてわかったんですけれど、僕、家事何もできないし、メイドを雇うと言ってもたまに行く時のためにいい状態を維持しておくのは至難の業。やっぱりサービスだなあって思ってた。

そこで僕は考えた アマンを日本に

村瀬 五百万ドル使って気づいたわけですね。ただ、これを高いと言うか、安いと言うかはその後のその人の生き方次第。

西 そう、そこで僕は考えた。

村瀬 何を？

西 自分のスタイルを作りたいと思ったんです。自分の気に入る場所は自分で作るうと。

村瀬 いっそのこと、自分の好きなホテルを作ろうと？

西 その通り！僕が自分のオフタイムを快適に過ごすための空間を作りたいというのはもちろんだけれど、自分でやる限りは儲かるビジネスとしてやりたかった。そこで、プロデューサーの森肇と建築家の隈研吾と一緒にアマンリゾーツの社長のエイドリアン・ゼッカーに会いに行ったんです。僕はほんとうは西表島のビーチにアマンを作りたいと思ったんだけど、ゼッカーはものすごく京都に作りたがっていました。結局、熱海の山の手の海を見おろす土地が最終候補になって、僕もゼッカーと一緒にプランを練って、あれは本当に楽しかった。僕のプランはゼッカーにもほめられたんだけど、入ってすぐの部屋が八畳の和室で窓の向こうには海が広がり、その隣には八畳のお風呂。和室は掘り炬燵になっていて、夜になると埋め込み式でその上に布団を敷いて寝るようになってる。そんな和風ヴィラタイプで行こうなんてところまで決まっていたんですが、土地の買収がうまく行かず、プロジェクトが頓挫してしまっただけはとつても残念でした。

村瀬 ああ、それが噂の熱海の幻のアマン



西和彦の
東京ホテルライフ

外国から来られたお客様さんと朝食をする時は、和食だとオークラの「山里の百合の間」。久しぶりに会う友だちとの食事ならば、パークハイアットの「ニューヨークグリル」か、オークラの「オーキッド・ルーム」のフランチ、あるいはオークラの「プールサイド・レストラン」など。

説だったんですね。アマン京都説も一時ずいぶん濃厚にささやかれてましたからね。アマンリゾーツがお好きだったんですか？
西 ええ、ゼッカーのホテルの傑作だった香港のリージェント（現インターコンチネンタル香港）が元々好きだったんです。泊まっていた、このホテルを作った人に会いたいと初めて思いました。アマンの中ではアマンダリは成功だけれど大胆さはない。アマンキラはまわりの地形とホテルが一体化しているところがいい。
ゼッカーに招待されてたっくさんのアマンに行きました。男ばかりで、トホホ・・・（笑い）。

自宅でも
ホテルライクに暮らす

村瀬 西さん、ホテルの情報はどうやって集めてますか？

西 五万冊くらいの本を持ってるんですけど、その一割が建築、インテリア、ホテル関係。だから、ホテル関係の本は見かけるとすぐ買うので、ほとんど持ってます。雑誌では分野は違うけどホテルのランキングをやっている「インスティチュショナル・インヴェスター」やアマンの「アミニューズ」もあります。村瀬さんの本も何冊か持っているし、雑誌「ホテルジャンキーズ」は以前から買って読んでました。いつも読みながら、こういう雑誌にいい格好して出るような奴にだけはなりたくないよなあって思っていたんだけど（笑い）。

村瀬 つい、ふらふらと（笑い）。新しいホテルがオープンしたりすると行きたくありませんか？

西 ええ。どこのホテルでも作った人の思想というものがあるので、それをチェックしに、わざわざは行かないけど、ついでがある時に必ず行きます。ニューヨークのブラザアネガリノベーションしたので見に行つたんですが、すごくよかったです。

村瀬 どんなどころが？

西 リノベーションしたことがわからないようなリノベーションをしたって言うんです。掃除してきれいになったなあくらいに

思われるようにしたって。

村瀬 それはなかなか泣かせるセリフですね。西 オナーの趣味はしつかり出てました。ホテルでいろいろな学んだことを自分の中のシステムに少しずつ取り入れてきたので逆にホテルに行く機会はこの頃減ったかもしれません。

村瀬 たとえばどんなことをホテルから取り入れていますか？

西 自宅ではどこの部屋でも音楽が聞けるようになっていたり、家具の設計も全部自分でしました。インテリアなんかいろいろヒントになって取り入れました。ホテル以上のものをめざそうとして、自宅にかけてある絵を毎月替えたり……。これをしているホテルはほとんどないと思います。それからホテルライフのスタイルみたいなものはずいぶん取り入れました。今の自宅には居間の真ん中にパティオがあるんですけど、パティオでの朝食とか……。あと、僕は通いのメイドさんにホテルのハウスキーパーが使っているのと同じようなチェックリストを渡して仕事をやってもらっています。

西流いいサービスを
受ける秘訣

村瀬 西さん、あちこちの定宿のホテルに「西のお泊まりグッズ」（笑い）を置いているそうですが。



西 ええ。まず、枕。僕、ソバ殻じゃなくちゃダメなんです。それから、パジャマに下着と靴下。あと、今はもう置いてないけど米。好きなワインにお気に入りのCDかな。

村瀬 現在それを常備してあるホテルはどこですか？

西 秘密です（と言いながらこっそり教えてくれる）ニューヨーク、パリ、ロンドン。国内では大阪。

村瀬 誰でもやらせてもらえることではありませんよね。西さん、今日も取材する側の私にワインのおみやげ持ってきてくださったり、カメラマンの方にも気を配ったり、見かけによらず、もとい、失礼（笑い）、すごくよく気がつくれるなあと思つて感心していたんですけれど、その気の配り、ホテルライフでも発揮してませんか？

西 いいお客として扱ってもらいたいつてみんなよく言うんだけれど、そのためには努力しなくっちゃあ。お金使うより、頭使わなきゃ。それと、文句言っているいろいろやらせるのは最低です。クレマーになつてはいけませんよ。僕は、こうしてもらいたいと思うことがあったら、どうやら相手から相手が気持ちよくやってくれるかをまず

考える。そのためにはいろいろ作戦練つて、努力はしなきゃね。

村瀬 なるほど。

西 ある行きつけのお寿司屋さんに絵を一枚貸していたんだけれど、ある日、「申し訳ありません。お借りしていた絵が盗まれてしまいました」って電話があった。こういう時にどう対応するか。僕はすぐに代わりに違つた魚の絵を届けた。僕にとってはその寿司屋で気分よく過ごす時間の方が絵の値段以上にずっと価値あるものだったから。その絵は今でもかかっているけど、行く度に楽しいよ。

バスルームには世界各国のシャンプーが

村瀬 西さんにとってハッピーな時間ってどんな時間ですか？

西 3Bと言いますが、Break, Bath, Bed。つまり、「ある仕事がおしまひー今から休みー」っていう瞬間、お風呂に入った瞬間、それからベッドに入る瞬間。村瀬 西さん、いつからお風呂好きになつたんですか（笑い）。

西 四十代になつてから。僕は本質的に風呂がきらいなんじゃなくて、風呂に水を入れるのがきらいなの、怠け者なのです。ウチの風呂場には世界各国のホテルのシャンプーが並んでいます。

村瀬 すごく我慢（笑い）。ところで、さっきの3Bをすべて備えたホテルが西さんの理想のホテル？

西 そうです。そこにリモコンが完備していると最高。動かないで何でもできるようなっているのがいいですね。以前は僕、部屋の温度や湿度にもうるさくて、一定でなくちゃいやだったんですが、最近は夏は暑くて、冬寒くてもいいじゃないかって思うようになりました。昔みたいに一分一秒を急ぐ生活じゃなくなつたからでしょう。実は五年前から日記つけてるんですよ。今度、本になります。

村瀬 へえ、意外ですね。で、何を書いているんですか？

西 毎日何を食べたとか（笑い）。日記をつけてみてわかつたんだけど、ここ三年くらいの予定を分析してみると、自分がどういう周期で動いているかがよくわかる。

村瀬 西さん、お話をみると、どこも見かけによらず、失礼（笑い）、すごくマメだしマジメですよ。

西 （胸ポケットから紙を取り出して自慢げに）ほれね。

村瀬 あ、こりや、すごい。今日の対談のレジュメじゃないですか。私なんか何も用意してないのに（笑い）。コレ、ご自分で作つたんですか？

西 他に誰が作るんですか！

村瀬 失礼。あ、コレ、もらつていいですか？（笑い）。

すべては 自分のスタイルを作るため

村瀬 西さんって、ムダをたくさんしてきてますよね。

西 (立ち上がって上着を脱ぎ、部屋の中を歩きながら、きつぱりと) いや、ムダじゃないです。すべては自分が今あるための必然だったと、僕は思っているんです。オークラやパークハイアットに住んだり、世界各地の高級ホテルを泊まり歩いて会社と個人の金をさんざん使ったのも、今の僕自身があるための大切な経験だったって。そしてそういう生活の中でつくづく感じたことが、人生において大切なのは自分の「様式美」を磨いて作りあげることだと思っんです。自分風の美意識のスタイルって言うのかな。

村瀬 西スタイルってどんなスタイルですか？
西 まず、生活のリズムとし

て、東京に住んで、週末に山か海に行く。

週末の別荘は東京から近くて料理がおいしいところということで、軽井沢と逗子・葉山を選びました。東京の自宅は公園のそばか東京駅の近くが条件。僕は自分の気に入る場所は自分で作りたいので、別荘は建築家と話し合っつて。金曜日に仕事が終わると、「さあ、きょうはサウスに行こうかな」とかその時の気分で東京駅で決めて……。

村瀬 その「サウス」って何ですか？

西 僕は生活空間を東西南北の四つに分けて呼んでいるんです。まず、仕事場が「ウエスト」、これは僕の名前が西だからなんだけれど(笑い)。「サウス」が海で逗子の別荘、「ノース」が山で軽井沢、で、「イースト」が仕事場の東にある自宅。

村瀬 「ファーフースト」、別宅、なんてのがあったりして(笑い)。ところで「西様式」のインテリアはどんな感じですか？

西 フランスとイタリアの国境風、といっても田舎風ではなく、モダンなイタリアの中のバリッという感じ。僕は和風でも、武家屋敷の強さを感じさせたり、秀吉の利休好みみたいな「力」と「立体」を感じさせるものが好きです。

村瀬 うーん、わかるような、わからないような。でも、それがまさに西風なのかも(笑い)。

ドアを開けて

約束の時間の一分前、部屋のチャイムがピンポン。ドアの陰から大きな体には似合わないはつかねずみのような目がのぞいた。ところが、次の瞬間、おちやめな小熊の目に。スーツの上着の中から得意そうにとり出したのは、おみやげのボルドーの赤ワイン。

対談の途中から西節が全開。上着は脱ぎ捨て、赤いサスペンダーをパチパチはじきながら、部屋の中をクマのように行ったり来たり。突然、窓を開けたかと思うとくると振り返るその目は獲物を狙うライオンの目。しかし、こうやって一見エネルギーをあたりにまき散らしているように、実はぐいぐいと場のエネルギーを吸い取っているのが西流。次なる「放電」が楽しみです。

ちなみに、お見送りしたエレベーターのドアが閉まる直前、「じゃあ、また」とはにかむように笑ったその目は母性本能をくすぐる子鹿ちゃん、でした。

村瀬千文

